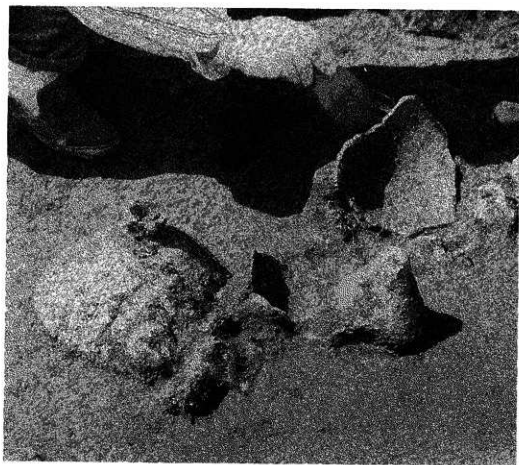


扇田町遺跡

——発掘調査の概要——



1995

名古屋市教育委員会



—表紙写真—

SD 01 土器出土状況

例 言

- 1 本書は、名古屋市南区扇田町に所在する扇田町遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 調査地点の地番は、名古屋市南区扇田町22番地である。
- 3 発掘調査は、平成6年6月13日から同年8月31日まで(梅雨期は中断)、面積約640㎡を対象に行われた。
- 4 発掘調査は共同住宅建築に伴い名古屋市教育委員会が受託し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員服部哲也、水野裕之が担当した。
- 5 発掘調査および資料整理、図版作成では、南山大学学生浅田博造、筒井美和の協力を得た。
- 6 出土遺物、記録類は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 7 本書の編集、執筆は主に水野が行い、SD 01は浅田が担当した。

目 次

I 遺跡の概要	SD 03	(15)
(1) 位置と環境	SD 04	(15-16)
(2) 遺跡の概要	SD 06・12	(16)
II 調査の経過	SD 18	(17)
III 遺構と遺物	その他の遺物	(18)
(1) 基本的層序	IV まとめ	(19-21)
(2) 遺構の概要		
(3) 遺構と遺物		
SD 01		(7-9)
SD 02		(10)
SD 17		(11-14)

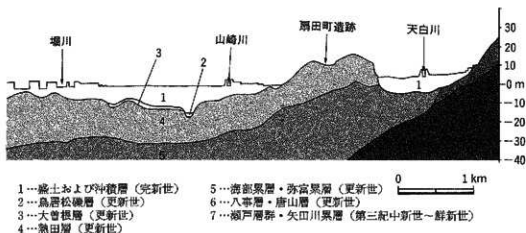
I 遺跡の概要

(1) 位置と環境

扇田町遺跡は、名古屋市南部の標高10 m前後の熱田層から成る更新世の台地上に立地している。台地は東側の天白川、西側の山崎川に挟まれて南北に長く、これが浸食によってさらに開析されている。台地西側の低地は、熱田層の埋没段丘上に堆積した沖積層で覆われている。明治時代の地形図（第3図）をみると、低地部分は水田として利用されていたことがわかるが、今ではほとんど見る事ができない。

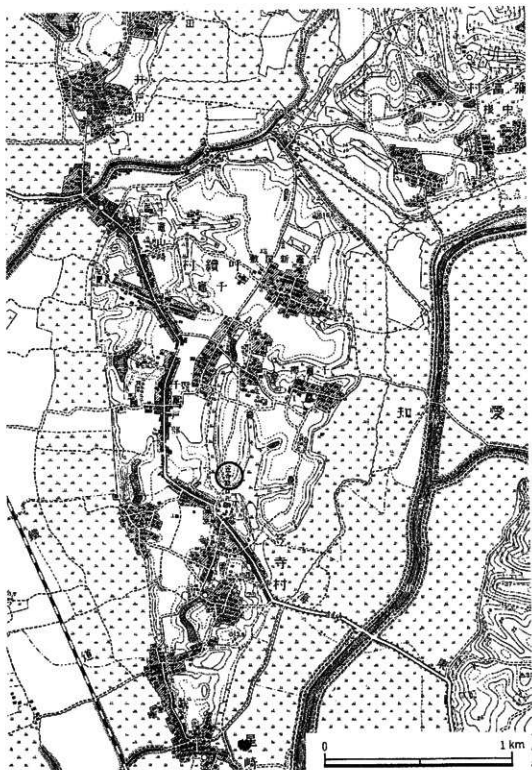


第1図 遺跡位置（丸印）〔5万分の1〕



第2図 遺跡付近地質断面図（第1図AB面）（註1）

遺跡は、比較的小さな南北に伸びる半島状の南端部分にあたる。調査地点の標高は14 mあまりである。遺跡付近の現況は、閑静な住宅街となっている。



第3図 遺跡付近地形図（2万分の1、明治26年大日本帝國陸地測量部「熱田」による）

(2) 遺跡の概要

扇田町遺跡は、これまで発掘調査が行われたことがなく、今回の調査が初めてである。しかし、昭和40年代頃には工事その他によって古墳時代や弥生時代後期の土器、数軒の住居跡などの存在が知られていた(註2)。また、遺跡範囲の北東部には3基ほどの小規模な古墳が存在していたとされているが、現在は確認できていない。

遺跡の範囲は楕円形を呈し、長軸は北西から南東方向に200mあまり、幅が100mあまりの大きさに推定されている。

1984年には、遺跡の北端部近くで宅地の花壇から完形の壺形土器を含む数点の弥生時代後期の土器が、溝または土坑と思われる遺構から出土している。

当遺跡の周辺は、第4図や第18図のように弥生時代、古墳時代を主体とした集落などの遺跡の多い所であり、それぞれが関連を持つであろう遺跡群を形成している。見晴台遺跡や桜田貝塚などでは、弥生時代後期の環濠の一部が検出されている。



第4図 調査地点(黒丸印)と周辺の遺跡

15-25 桜台高校遺跡	15-30 扇田町遺跡
15-26 桜本町遺跡	15-31 桜本町低地遺跡
15-28 桜田貝塚・貝塚町遺跡	15-32 見晴台遺跡
15-29 春日野町遺跡	15-33 笠寺観音遺跡

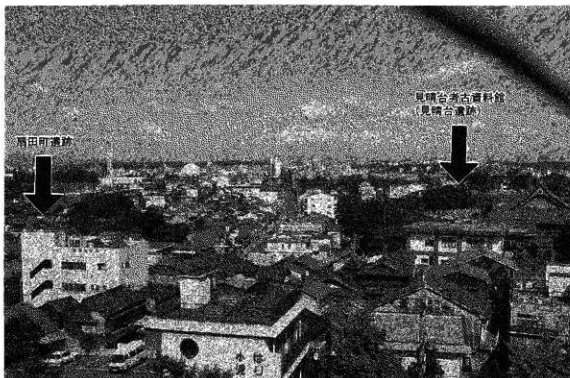


写真1 遺跡の遠景(西から)

II 調査の経過

扇田町遺跡という埋蔵文化財包蔵地内で集合住宅の建築計画がおこり、市教育委員会文化財課では事業者の要請を受けて、予定地内の既存アパート等の空き地部分で試掘調査を行い、遺跡の残存状態や発掘調査の必要性を調べた。その結果、一部で溝状の遺構や包含層が検出され、台地の旧地形が周辺の道路や宅地と比べて削られずに残っている状況であった。このため、建築工事の事前調査としての発掘調査が必要であることとなり、事業者と協議の結果、市教育委員会が発掘調査を受託した。

調整事務と現地との条件の関係から6月13日から事業者の行う表土除去工事を立ち合うことになった。しかし、梅雨期に入ったため表土が除去された段階で、梅雨明けまで待つこととなった。その間の7月4日からは、発掘調査区域に基準点とグリッド杭を設置した。7月18日から作業員を投入し、遺構の検出をはじめた。遺構は、調査区のほぼ全体に分布しており、排土置き場のスペースをつくるために調査区北東部の約80㎡ほどを先に記録し、これにあてるといっや変則的な調査となった。7月22日からは、残りの約560㎡を調査した。本年の夏は特に暑い日が続き、日蔭のほとんど無かった発掘現場では、1時間おきに休憩をとらなければならない日が多かった。

8月9日に、完掘後の遺構写真撮影を行い、8月11日からは遺構平面図を平板測量によって記録した。

8月22日からは、発生土による埋め戻しの作業にはいった。



写真2 調査前の状況

III 遺構と遺物

(1) 基本的層序

調査地点では、熱田台地の遺跡で通常みられるように、基盤層である黄橙色土の熱田層上面が基本的に最終遺構検出面となっている。現存している考古資料の対象となる熱田層上の堆積層は、地表直下の表土層、茶褐色土層、黒褐色土層の主に3層からなっている。しかし、基盤層直上と思われる黒褐色土層は、調査区の南側に位置するSD 01(方形周溝墓)の内側の一部に30~40 cmの厚さで認められただけであった。この土層からは、土器の細片と被熱して破砕したと思われるチャート礫片が検出されているが、この黒褐色土層がもともと調査区全体に広がっていたものか、この部分だけにあり、かつSD 01と関係するものかは不明である。

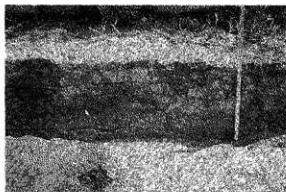
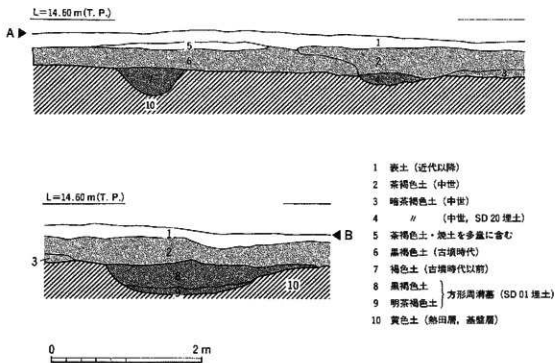


写真3 土層断面

茶褐色土層は調査区の南側に30~40 cmの厚さで堆積しているが、北側部分では部分的に薄く残っているだけであった。この層には、中世陶器片が少量含まれる。



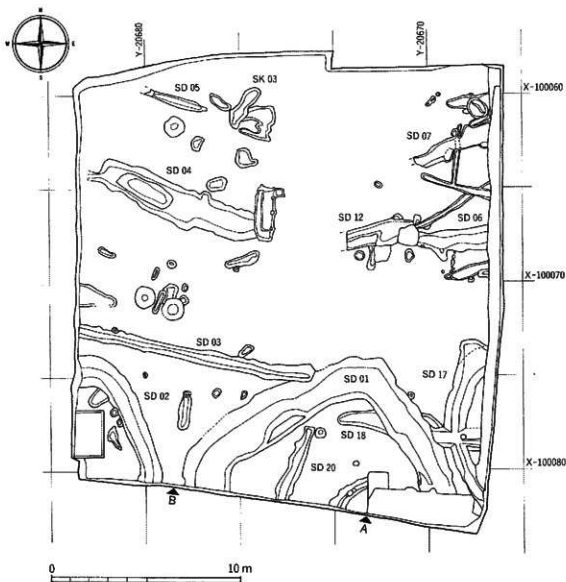
第5図 調査区南面土層断面図 (第6図A-B同)

(2) 遺構の概要

遺構は、ほとんどが熱田層面で検出したものであった。明治39年から昭和24年まで存続した「大日本麦酒株式会社」銘のビン（註3）が出土した方形土坑や、これとほぼ同時期と思われる陶磁器などの廃棄土坑が数箇所検出されたほか、近年まであったアパート基礎の攪乱部分が少しあったものの、中世および古墳、弥生時代の遺構が検出された。

遺構の種類は、中世の溝状遺構が9条、古墳時代では小規模で低墳丘であったと想定される古墳周溝2基（円形と方形と思われる）、そして弥生時代後期の方形周溝墓1基が主な遺構である。他には、機能や時期が明確でないピットが検出された。

中世の遺構は、調査区のはほぼ全域にわたっているが、古墳の周溝2基と方形周溝墓1基は、互いに切りあうことなく調査区の南側に集中している。



第6図 主要遺構配置図

(3) 遺構と遺物

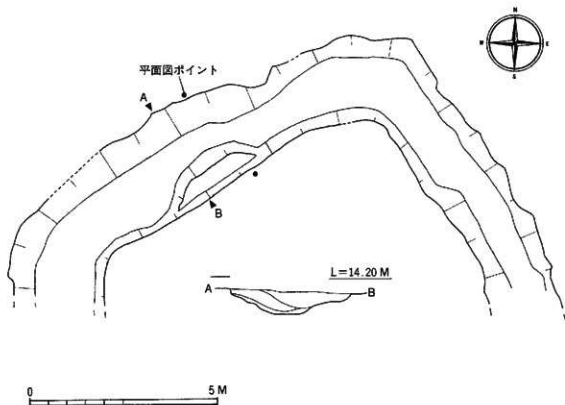
SD 01 調査区の南端中央部で検出された方形周溝墓と考えられる遺構である。溝は、幅2～3 m、深さ約50 cmを測り、断面形は船底状を呈する。遺構全体の約半分を検出したとすれば、外側の辺が約13 mのやや膨らんだ正方形を呈すると思われる。方形区画内の状態は、基盤層の上に被熱して破砕したと思われるチャート礫片を含む黒褐色土層が約20 cm堆積している。この層からは少量の土器細片が検出されたが、周溝墓と関係する土層であるかどうかは明確でない。墓壇など主体部の痕跡は検出されなかった。



写真4 SD 01

周溝埋土は、黒褐色土を主とする。出土遺物は、高杯の集中する地点以外は、ほとんど出土しない状況であった。高杯は北西側の周溝中央付近で、主体部側から台状に張り出した部分(基盤層を削り残した形状と思われる)があり、このすぐ下の位置で第8図の状態に高杯4個体が集中して並ぶように検出された。

出土した高杯は、坏部が脚部の器高を越え、それまでの高杯の形式と比べ脚部の内彎がやや

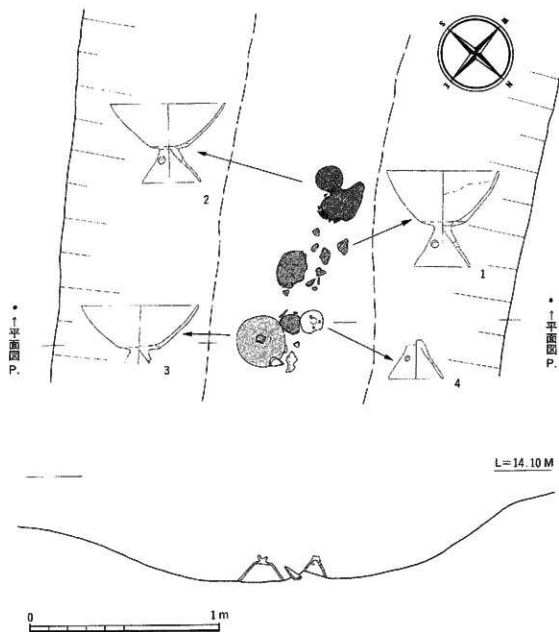


第7図 SD 01 遺構図

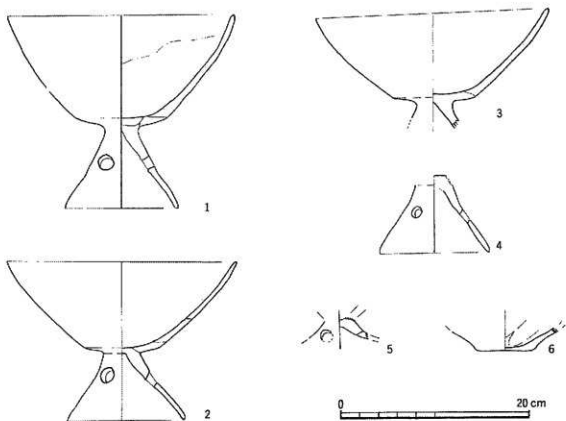
圧縮された形状および直線状のものとなる。
 坏部の外傾も大きくなりつつある段階のも
 である。これらの要素は、遍間Ⅰ式（註4）
 の3段階から4段階にかけて含まれる時期に
 相当するものであると思われる。



写真5 SD01 土器出土状況



第8図 SD01 土器出土状態（土器復元実測図のスケールは8分の1）



第9図 SD 01 出土土器



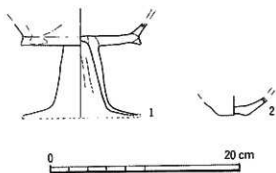
写真6 SD 01 出土土器

SD 02 調査区の南西部で検出された方形墳の周溝の一部と思われる遺構である。幅1～1.2 m、深さ約50 cmを測る。埋土は、黒褐色土である。大きさは、一辺が約9.5 mと推定される。盛土部分は近代以降の攪乱が大きいことなどその痕跡および主体部の検出はできなかった。

埋土には遺物が少なく、検出部分の北部で土師器高環と土師器鉢と思われる底部片が埋土中位から出土しただけであった。遺物の時期は松河戸Ⅱ式期（註5）頃に相当すると思われる。



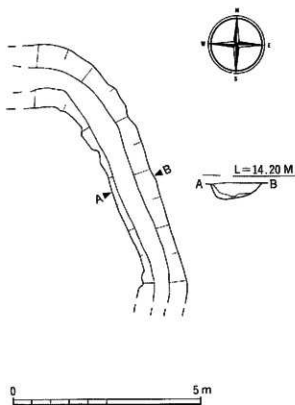
写真7 SD 02



第10図 SD 02 出土土器



写真8 SD 02 出土土器



第11図 SD 02

SD 17 径約 12 m の円形墳の周溝の一部であり、周溝の幅は、1～1.2 m、深さ約 0.5 m を測る。墳丘は、中世の削平により尖われ主
 体部も不明である。基本層序は、黒褐色上(上
 層) 明褐色土(下層)に分けられる。遺物は、
 黒褐色上からの円筒埴輪が最も多く、他に土
 師器、須恵器、鉄製品が若干数出土している。
 円筒埴輪の出上状態は、ほぼ個体毎にまとまっ
 ており、周溝埋土の堆積時に、墳丘より転落
 したものと考えられる。扇山町遺跡では、
 SD 01 (第 14 図以下同じ、5)、SD 17 (1～
 4)、SD 18(細片)、東壁トレンチ茶褐色土(6)
 において円筒埴輪が検出されている。

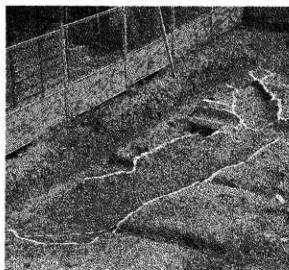


写真 9 SD 17

円筒埴輪 1 (第 14 図の 1)

底部を欠損しているが、二突帯三段の形状
 になると思われる。赤褐色を呈し、焼成は良
 好である。胎土は、やや粗く他の埴輪と共通
 して、赤褐色砂粒の混和材を含む。外面調整
 は、タテハケで、口縁付近にヘラ状工具によ
 る沈線が施される。内面は、ナメナメ、一
 部にケズリ調整が施される。他に、口縁内外
 面には、より強いヨコナデが施される。突帯
 は、断面が、台形状でしっかりとした作りで
 ある。

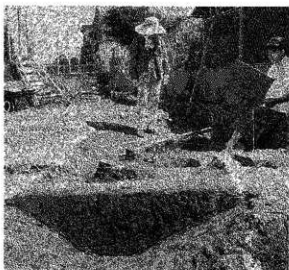


写真 10 SD 17 埋土

円筒埴輪 2 (第 14 図の 2)

現代の溝により切断されているが、破片(第 13 図の 2)は同一個体であると考えられ、全
 体として二突帯三段の形状になると思われる。淡褐色を呈し、焼成はやや軟質だが、黒斑はな
 い。胎土は、やや粗く他の埴輪と共通して、赤褐色砂粒の混和材を含む。外面調整は、タテハ
 ケで、最上段にヘラ記号の一部であると思われる沈線が施される。内面調整は、ヨコナデであ
 る。口縁内外面には、円筒埴輪 1 と同様に、より強いヨコナデが施される。突帯は、低平で、
 下段のものは不整形であるが、上段のものは断面が M 字状で、より丁寧な作りである。

円筒埴輪 3 (第 14 図の 3)

円筒埴輪の口縁で、淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は、やや粗く他の埴輪と共通し
 て、赤褐色砂粒の混和材を含む。外面調整は、タテハケであり、口縁付近はナメナメとなっ
 ている。内面調整は、ヨコナデである。図化していないが、同一個体と思われる破片によれば
 突帯は、低平で断面は台形状である。

円筒埴輪 4 (第 14 図の 4)

円筒埴輪の基底部である。淡褐色を呈し、焼成は軟質で、表面の剝離が著しい。胎土は粗く、赤褐色砂粒が表面化している。外面調整は、表面剝離のため判然としないがタテハケと思われる。内面調整は、ヨコナデである。突帯は、不調整で断面形も一定しない。

円筒埴輪 5 (第 14 図の 5)

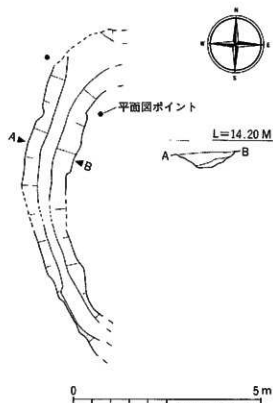
刺頭形円筒埴輪の頸部である。淡褐色を呈し、焼成は軟質である。胎土は、やや粗く他の埴輪と共通して、赤褐色砂粒の混和材を含む。表面剝離が著しく、内面にわずかにヨコナデが確認できるのみである。突帯は、断面が三角形状を呈する。

円筒埴輪 6 (第 14 図の 6)

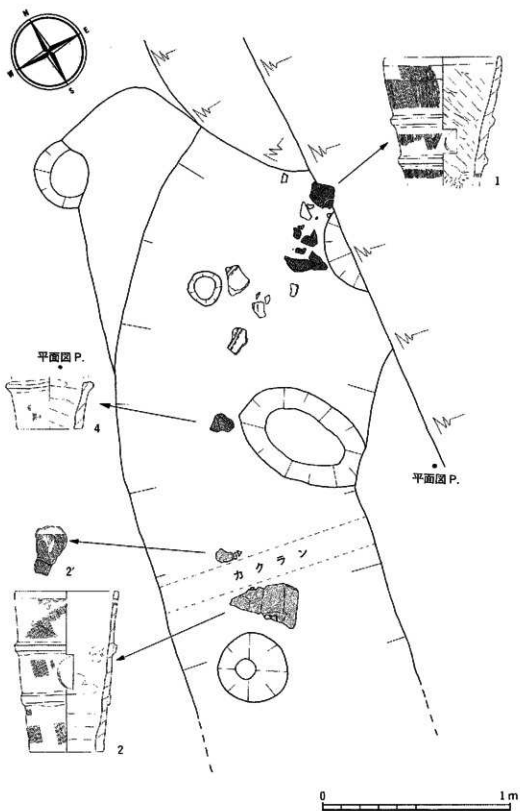
円筒埴輪の基底部である。淡褐色を呈し、焼成は軟質である。胎土は、やや粗く他の埴輪と共通して、赤褐色砂粒の混和材を含む。外面調整は、タテハケで、内面調整は、不定方向のナデである。底部は、内外面に指跡圧痕が強く残る部分に粘土紐の接合痕が確認できる。整形時の粘土の凹凸が明瞭に残る。



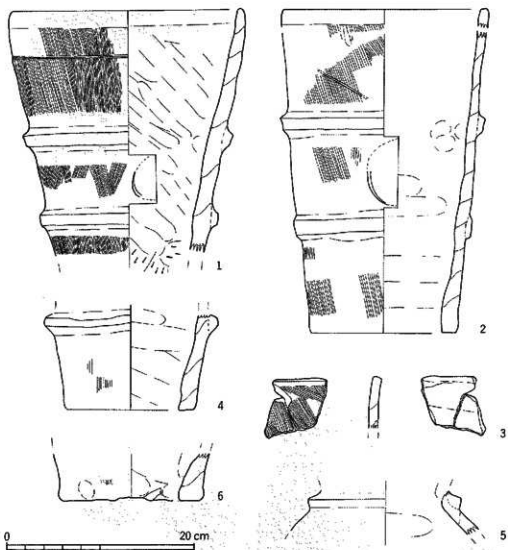
写真 11 SD 17 埴輪出土状況



第 12 図 SD 17



第13図 SD 17 壇輪出土状況



第 14 图 SD 17 他出土埴輪



写真 12 SD 17 他出土埴輪

SD 03 幅1 mあまり、長さ13 mの直線状の溝を地山面で検出した。東側は、SD 01を切って端部となっているが、西側は、さらに続くと思われる。断面形は、浅いU字形で、現存する深さは、約30 cmである。埋土は、茶褐色土で均質であった。埋土からは、13世紀～15世紀頃の陶器片が少量出土した。器種には、山茶碗、仏花瓶などがある。

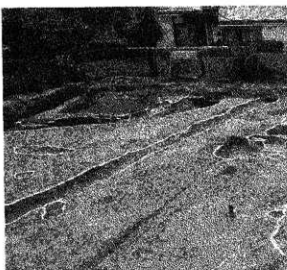


写真13 SD 03

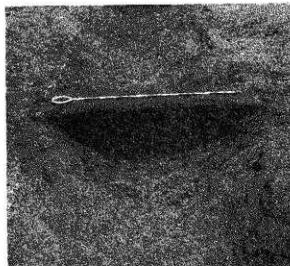


写真14 SD 03埋土

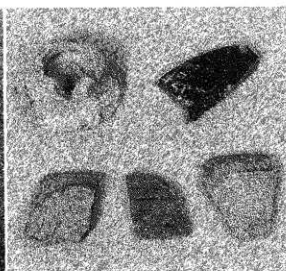


写真15 SD 03出土陶器

SD 04 幅約1.8 m、長さ約10 mを地山面で検出したが、両端はさらに続いていたかもしれない。西側の遺構底面は、幅約1 m、長さ3 mほどの範囲で深くなっていた。埋土は茶褐色土で均質であり、15世紀頃と思われる陶器、土師器皿片が少量出土した。土師器皿には、ロクロ整形のものと非ロクロ整形のものがある。



写真16 SD 04

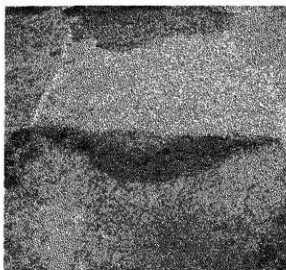


写真 17 SD 04 埋土

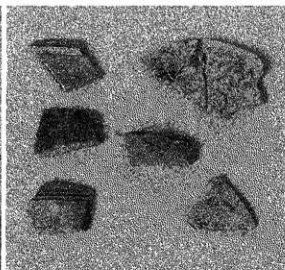


写真 18 SD 04 出土陶器類

SD 06・12 東西方向の溝である。SD 12 の西側は、擾乱のため消失しており、SD 04 との関係は不明である。遺構の幅は、約 1.2 m で、東側は調査区外へ続く状況である。深さは、25 cm ほどで、埋土は均質な茶褐色土である。埋土からは、13 世紀から 16 世紀頃の陶器、土器類が出土した。器種には、山茶碗、壺、天目茶碗、土釜、土師器皿などがある。

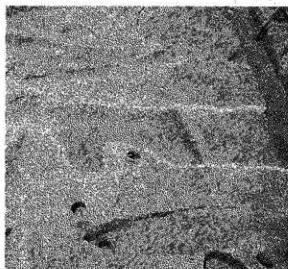


写真 19 SD 06



写真 20 SD 06 埋土

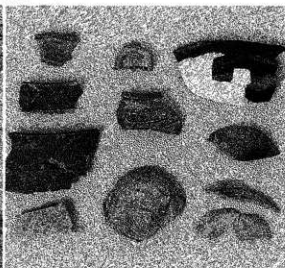


写真 21 SD 06、12 出土陶器類

SD 18 調査区の南東部の黒褐色土包含層
面で、SD 01、SD 17を東西方向に切る状態
で検出された。幅は、1.5~2 mほどあり、西側
が端部になるのか、SD 20とつながるのかは不
明瞭であった。埋土は、茶褐色土で均質であ
った。埋土からは、13世紀頃の鉢や土師器皿片
が少量出土した。



写真 22 SD 18 検出状況



写真 23 SD 18

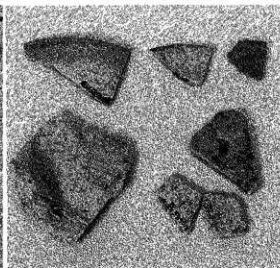
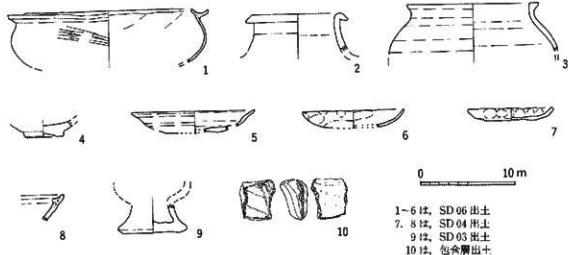


写真 24 SD 18 出土品

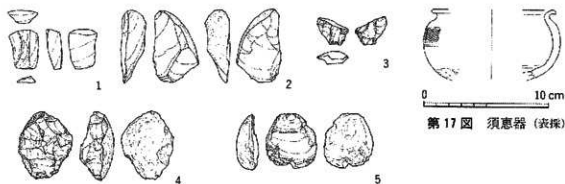


第 15 図 中世の出土遺物 (スケール 1/4)

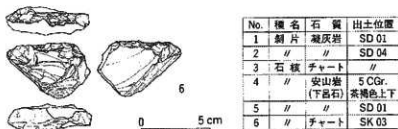
その他の遺物 古墳時代、中世などの遺構から弥生時代以前の石器が検出されている。第16図の1は、石刃状の剥片であり風化がかなり進んでいる。2は、1と同一母岩と思われる厚手の剥片であり、この2点は、旧石器時代に属するかもしれない。3～6の資料は時期の限定が困難である。

SD 01 の内側に残存した黒褐色土層およびSD 01 埋土からは、チャート礫が火を受けて破砕したと思われる3～6cmほどの礫片が多数検出された(写真26)。SD 01 の埋土中に含まれることから弥生時代後期頃かそれ以前に被熱したものである。出土状況は、散在するだけであり、焼上や木炭は特に伴っていない。

また、SD 01 西側の茶褐色土層からは、石英の礫を素材にした火打石が1点検出された(第15図の10)。これは、包含する陶器の時期から13～16世紀に属するものと思われ、名古屋城三の丸遺跡出土の室町～戦国時代の火打石と同様の石材を用いている。他に、調査区内からは、5世紀代の須恵器片が少量検出されている。



第17図 須恵器(表採)



第18図 栗田町遺跡出土石器(スケール1/3)

No.	種名	石質	出土位置
1	剥片	凝灰岩	SD 01
2	//	//	SD 04
3	石核	チャート	//
4	//	安山岩 (下呂石)	5 CGr. 茶褐色上下
5	//	//	SD 01
6	//	チャート	SK 03

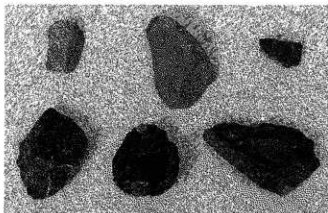


写真25 出土石器

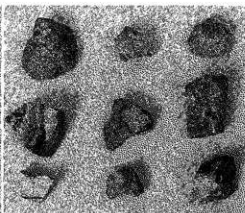


写真26 被熱礫

IV まとめ

扇田町遺跡は、絵岡や伝承などから、田字宝珠庵に3基の小古墳があったらしいことや、昭和40年代頃、弥生時代や古墳時代の住居跡が削平工事の際に発見されたりしたことで遺跡が知られるようになったが、本市が行う発掘調査は、今回が初めてであった。狭い調査範囲ではあったが、遺跡の内容を知る手がかりを得ることができた。

検出された遺構の種類、時期から2期に分けて各期の遺構の変遷を中心に簡単にまとめる。

I期（弥生～古墳時代）

弥生時代の終わり頃の方形周溝墓（SD 01）と古墳時代の方形墳（SD 17）と円形墳（SD 02）が検出された。

SD 01 廻間I式3～4段階

↓

SD 17 濃尾平野の埴輪変遷（註6）のⅢ期1段階（須恵器猿投窯編年の東山111号窯期に相当）

↓

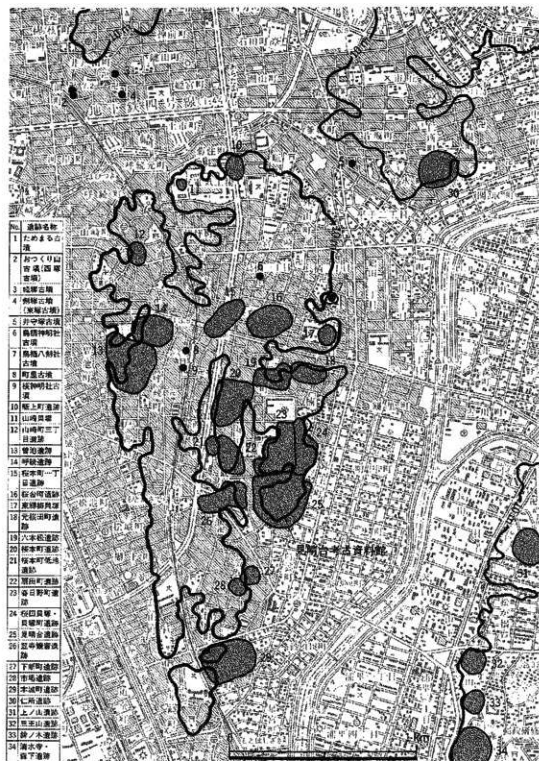
SD 02 松河Ⅱ式期（須恵器猿投窯編年の城山2号窯期頃に相当）

以上のような遺構の時期差が考えられるが、SD 01は、その存在が意識されていたように、切り合うことなくSD 17とSD 02に挟まれている状況である。

また、当遺跡から500mほど北東の六本松遺跡では、昭和38年と同40年の宅地造成工事の際に溝状遺構が調査され、二突帯二段で赤色土師質の円筒埴輪（Ⅲ期の3段階頃か）が発見されている（六本松北遺跡）。また、昭和41年には、5～6世紀の方形周溝墓（1辺が7mあまり）が検出され、埋土から須恵器蓋坏、高坏、甕が出土している。このときは他に、弥生時代後期の堅穴住居が7軒検出されている（六本松南遺跡）（註7）。これらの遺構は、今回扇田町遺跡で検出した遺構とともに、笠寺台地上に展開する周囲の遺跡群を考えるうえで重要な資料である（第18図参照）。

II期（中世）

溝状遺構が10箇所ほどで検出されたが、残存状態は良くない。遺構の上層は失われているが、地山は、あまり深く掘り込まれていないことから、本来、比較的規模の小さい遺構であったようである。溝の機能や性格については、現在のところ不明である。埋土からは、13世紀～16世紀の陶器類がわずかに検出された。



第 18 図 扇田町遺跡周辺の弥生～古墳時代遺跡分布 (2 万分の 1)



第19図 扇田町遺跡（丸印）と中世城館の分布（2万分の1）

註

- (1) 名古屋市公害対策局 『名古屋市地質断面図集』 1987 による。
- (2) 三渡俊一郎他 『南区の原始・古代遺跡』 1969
- (3) 伊藤厚史 『東古渡町遺跡第5次発掘調査概要報告書』 名古屋市教育委員会 1994 に関連資料が記載されている。伊藤氏より御教示をえた。
- (4) 赤塚次郎 『廻問式土器』 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 廻問遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター 1990
- (5) 赤塚次郎 『松河戸様式の竝定』 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集 松河戸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター 1994
- (6) 赤塚次郎 『尾張型埴輪について』 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集 池下古墳』 愛知県埋蔵文化財センター 1991
- (7) 註2に同じ
- (8) 赤羽一郎 遠藤才文 梅本博志 『愛知県 中世城館跡調査報告Ⅰ(尾張地区)』 愛知県教育委員会 1991

扇田町遺跡

—発掘調査の概要—

1995年3月31日

編集 名古屋市見晴台考古資料館
発行 名古屋市教育委員会
印刷 輪クイックス



